

大教室の講義における大学生の私語のマネジメント

—集団随伴性による他行動分化強化を用いた介入の有効性—

Decreasing inappropriate talking behavior in classroom of university students

○佐藤 寛¹・佐藤 美幸²(関西大学社会学部¹・名古屋女子大学文学部²)Hiroshi SATO¹ and Miyuki SATO²(Kansai University¹; Nagoya Women's University²)

keywords: 大学生, 行動マネジメント, 私語, 授業

【問題と目的】

講義において学生の私語が繰り返されると、他の学生や担当教員にとって著しい支障が生じる。こうした事態を防ぐために、私語をしている学生を注意する、退出させる、出席カードを没収するなどの罰を中心とした対策が講じられている(塚田・佐藤, 2006)。

本研究では「私語をする」という不適切な行動に罰を与えるのではなく、集団随伴性を用いた他行動分化強化によって私語の低減を目指す介入の有効性を検討した。

【方法】

1. 対象者 心理学を専攻する大学1年生向けの科目「入門心理学」の履修者を対象とした。履修者は2つのクラスに分かれており、片方のクラスには集団随伴性に基づく行動マネジメントを実施し(介入クラス: 履修者123名)、もう片方のクラスには通常の授業を実施した(統制クラス: 履修者121名)。

2. 私語の評価 私語の評価は、5分インターバルのタイムサンプリング法を適用し、インターバル終了時の私語による騒がしさを2名の観察者が3段階(私語なし、私語はあるが気にならない、私語が気になる)で記録した。各回の授業ごとに、(観察者Aの評価平均値+観察者Bの評価平均値)÷2の式によって私語の評価点を産出した。

3. 介入手続き ベースライン期では、介入・統制クラスともに私語の評価のみを実施し、私語が著しい場合には授業1回あたり最大2回を上限として担当教員がクラス全体に向けて注意を与えた。介入期では、介入クラスにおいては成績評価全体の15%に相当する「授業協力点」を設定することを伝え、各回の授業で教員が一度も私語の注意を行わなければ+2点、注意が1回であれば+1点が受講生全員に与えられることを教示した。加えて、授業の終わりにその回に獲得された授業協力点のフィードバックを行った。統制クラスにおいては「授業協力点」を設定することのみを教示し、具体的な強化基準については説明を行わなかった。プローブ期では、「授業協力点」の終了を両クラスに伝え、介入クラスの授業後のフィードバックも行わなかった。

4. 授業評価アンケート 授業の全般的な満足度を評価するために、介入期の前後において大学がweb上で実施している授業評価アンケートを集計した。アンケートは「全体としてこの授業を受けて満足しましたか」などの評価項目に5点満点で回答する形式で実施され、介入クラスでは23名、統制クラスでは31名からアンケートへの回答が得られた。

【結果】

私語の評価点の推移をFig. 1に示した。介入クラスはベースライン期のすべてのセッションにおいて

統制クラスよりも私語の評価点が高かったが、介入が開始されると私語の評価点が直ちに減少し、統制クラスよりも低い水準となった。統制クラスでは授業の回が進むにつれて、私語の評価点が増加する傾向が認められた。なお、プローブ期でも介入クラスの私語の評価点は低い水準に保たれていた。一方で、統制クラスでは評価点が介入クラスと同程度まで減少していた。

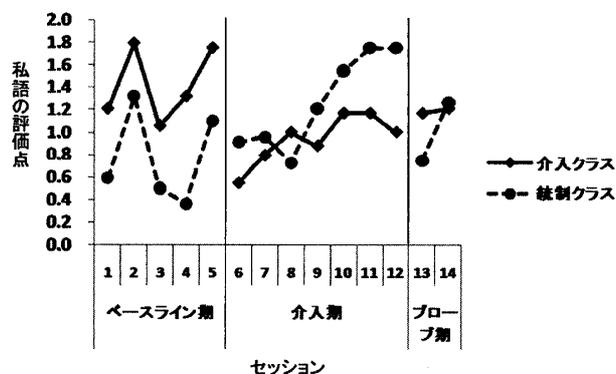


Fig. 1 授業中における私語の評価点の推移

授業評価アンケートにおいて、介入クラスは統制クラスよりも授業評価が高まっていた。たとえば、「全体としてこの授業を受けて満足しましたか」という項目への評価は、介入期前の段階で介入クラスの平均値が4.2、統制クラスの平均値が4.4となっていたが、介入期後には介入クラス4.9(+0.7)、統制クラス4.7(+0.3)と介入クラスの方が大きく評価が改善した。

また、「学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか」という項目では、介入期前で介入クラスの平均値が4.4、統制クラスの平均値が4.4であったが、介入期後は介入クラス5.0(+0.6)、統制クラス4.6(+0.2)となっていた。その他の項目においても、介入クラスの評価の改善度は統制クラスの改善度よりも大きい値を示す傾向が認められた。

【考察】

以上の結果から、集団随伴性による他行動分化強化を用いた行動マネジメントが大学生の授業中の私語の減少に有効であることが示唆された。強化を中心とした介入は、罰を中心とした介入に比べて、ネガティブな情動的效果を誘発しにくいなどの利点を持つ。本研究においても介入クラスの方が学生からの全般的な授業評価が高まりやすいことが示されており、この点を裏づける結果であると考えられる。今後の課題として、強化を中心とした介入と罰を中心とした介入を直接的に比較した研究や、最適な強化基準の設定を詳細に検討する研究を通じて、より効果的な行動マネジメントの方法を明らかにする必要がある。